

「日本型対人援助関係の実践知の抽出・統合」のための 理論的分析枠組みの構築

正 木 治 恵 (千葉大学看護学部)

清 水 安 子 (千葉大学看護学部)

田 所 良 之 (千葉大学看護学部)

谷 本 真理子 (東京女子医科大学看護学部)

斉 藤 しのぶ (東京女子医科大学看護学部)

菅 谷 綾 子 (千葉大学大学院看護学研究科)

榎 元 美紀代 (千葉大学大学院看護学研究科)

黒 田 久美子 (千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター)

本研究の目的は、日本型対人援助関係の実践知の抽出・統合のための理論的分析枠組みを構築することである。メタ統合の手法を用いて、千葉看護学会会誌の最近2年間に掲載された修士論文・博士論文に関する原著論文で、看護実践に関する質的研究13論文より、対人援助関係の理論的分析枠組みを導いた。その結果、次のことが明らかになった。すなわち、看護実践過程において、看護専門職の認識・行動ならびに対象（個人、家族、地域住民）の認識・行動は質的に変化し、それぞれ援助の発展、アウトカムをもたらす。これらの変化は、両者の相互作用の現象を通して生じる。この相互作用の結果、看護専門職の認識・行動は、より多義的で、個別的かつ包括的になり、焦点化され、専門性も高まる。一方、対象もその過程を通して、潜在力が発現し、主体性が発揮され、新たな気づきや能力を獲得し、より豊かな自己を作り出す。

この枠組みの構築により、対象特性に応じたメタ統合の課題として、①相互作用を通じた看護専門職の質的变化（援助の発展）、②対象の看護専門職との相互作用を通じた質的变化（アウトカム）、③両者が作りあげていく相互作用の現象が明らかになった。

KEY WORDS : meta-synthesis, clinical nursing knowledge, interpersonal relationships, qualitative

I. はじめに

本研究は、21世紀COEプログラム「日本文化型看護学の創出・国際発信拠点—実践知に基づく看護学の確立と展開—」の研究プロジェクトの一つである「日本型対人援助関係」サブプロジェクトの研究の一部である。本サブプロジェクトは、質的研究論文のメタ統合を通して、対象者の特性に応じた関係の築き方や看護の関わり方を文化の観点を含めて分析し、看護実践モデルを創出することを目的にしている。

対人援助が基盤となる看護学は、個々人の生活や考え方の背景となる文化的側面を重視する必要がある。我々が行う看護実践には、日本人の文化的側面が影響していること

が考えられるが、看護実践そのものから、そこに内包されている対人援助関係を抽出した研究はごくわずか見られるのみである¹⁾。それも看護ケアの現象にみられる相互作用を記述したもので、枠組みを提示するものではない。

一方、日本における看護実践過程を克明に記録し、そこから看護実践知を抽出した論文は、看護学研究科における修士論文、博士論文に多くみられる。また、異なる研究テーマと分析方法を用いている複数の質的研究論文を統合していくメタ統合の手法が紹介されている。そこで本研究では、看護実践知を示した修士論文、博士論文のメタ統合により、対人援助関係を抽出・統合していくための理論的分析枠組みを構築することを試みた。

II. 研究目的

日本型対人援助関係の実践知の抽出・統合のための理

論的分析枠組みを構築する。

Ⅲ. 用語の定義

看護実践における「対人援助関係」を文献検討より定義した。

1. 文献検討

オーランドは²⁾、看護をダイナミックな人間関係をもとにした方法として、「患者とともに話し合い、追究したすべての観察は、患者のニーズを確かめたり、満たしたりする場合においても、患者が不安や苦痛を味わっていないことを見出す場合においても、すぐ役に立つものである。(中略)患者と看護婦の力動的関係—患者の行為が看護婦に影響し、逆に看護婦の行為が患者に影響する関係—の必要性を自覚させられるであろう。この相互関係、あるいは両者の人間関係の進行状態といったものは、それぞれの場でユニークな形を取るものである。」と述べている。また、トラベルビーは³⁾、「人間対人間の関係は基本的に、看護婦とその看護を受ける人とのあいだの、ひとつの体験あるいは一連の体験である。この体験の主要な特色は、個人(あるいは家族)の看護上のニーズが満たされる、ということである。その人間対人間の関係は、専門実務看護婦が目的的につくり、維持するものである。」としている。また、対人行動学分野で相川らは⁴⁾、「ほかの人に対する振る舞いやものの言い方に関して認められる違いを表す概念が、社会的スキルである。「社会的スキル」を字義通りに定義すれば「他者との関係や相互作用のために使われる技能」ということになる。」とし、適切に実行するためには練習やトレーニングが必要な場合もあると述べている。

これらより、本研究における対人援助関係の定義を以下のように定め、またその前提ならびにキーワードを示した。

2. 定義：看護実践で、看護目標を達成するために看護専門職が築き上げてきた対象者との関係

3. 前提①：看護目標あるいは対象者の特性に応じて、＜期待される成果＞を得ていくプロセス(看護過程)における関係の築き方やかわり方が異なる。「対人援助関係」は、看護目標に向けて模索しながら援助していく過程で看護師が対象者と築き上げた関係性であり、その関係性が看護目標の達成と不可分である。よって、実践知としての「対人援助関係」は、その看護援助プロセスの詳細な記述から抽出できる。

前提②：看護目標の達成と不可分であるなら、その関係性を築くこと自体が看護技術であり、その内容が明確になれば熟練に向けた育成(トレーニング)が可

能である。

関連キーワード：かわり、対象者(患者)—看護師関係、コミュニケーション、相互作用、看護援助

Ⅳ. 研究方法

1. 対象論文の選択基準

本研究でメタ統合に用いる一次論文の選択基準として、看護援助の実践過程が詳細に研究成果に記述してあること、データ分析方法として質的分析を用いていること、研究としての質が保証されていることの3つをあげた。質の保証に関しては、本研究プロジェクトで作成した評価ツールにより保証される論文、あるいは看護学術誌に査読を経た原著論文として掲載されているもの、修士論文・博士論文とした。その選択基準を満たすものとして、千葉看護学会会誌の最近2年間(2003, 2004)の掲載論文で、修士論文・博士論文に関する原著論文であること、看護実践に関する質的研究であるが、看護の領域ならびに分析方法は限定しないこと、とした。

2. メタ統合の手順

NoblitとHareのメタ統合の7段階の手続き⁵⁾とPater-sonのメタスタディ⁶⁾を参考に、本研究におけるメタ統合を次のように実施した。

- 1) 選定した論文を精読
- 2) 各論文の研究目的、研究データ(内容、収集方法)、研究成果を要約
- 3) 研究成果から対人援助関係に関連すると捉えられる記述(実践知)を選択
- 4) 3)の記述が表している現象から、各論文に共通する要素を比較検討
- 5) 要素間の関係を検討
- 6) 要素間の関係を図解して枠組みを明示
- 7) 研究者間で枠組みの妥当性の検討

Ⅴ. 結果

1. 対象論文の概要

論文選択基準を満たす13の原著論文が選定された。選定された論文の概要を表1に示す。これらは修士論文ならびに博士論文の両方を含み、看護の領域も、地域看護学、小児看護学、成人看護学、母性看護学等多領域にわたっていた。研究データの収集も、研究者自身が看護実践を行いながらその援助過程を克明に記録したものと、看護専門職から看護実践内容とその判断過程をインタビューしたもの、看護実践しながら対象者にインタビューしたもの等、異なる方法で行われていた。

表1 対象論文一覧

著 者	研 究 目 的	研 究 デ ー タ	看 護 援 助	分 析 方 法
佐藤 紀子 (2004) ⁷⁾	家族が日常生活の営みのなかで行う育児や介護を家族によるケアと捉え、家族が育児や介護を成し遂げていくために発揮する力すなわち「家族のケア力」の高まりを明らかにし、家族のケア力を高める看護援助を検討する	①研究者が保健師として三家族に7～9ヶ月間継続して援助を行ったなかで得られたデータ、②援助過程における家族員の言動と保健師（筆者）としての言動とそれに伴う認識	①援助対象：育児に取り組む家族1世帯と介護に取り組む家族2世帯の家族員、②援助姿勢：家族のケア力を高めることを意識しながら、対象家族のニーズに応じて行う	家族のケア力の高まりに関連した、実施した援助行為と家族員の認識および行動との相互作用の状況を、時間経過にそって整理し、家族のケア力を高める看護援助を導く
井出 成美 (2004) ⁸⁾	保健師の保健福祉行政サービスの事業化および運営管理における看護問題のアセスメント、看護目標、看護方法の特質を明らかにする。	①サービス事業化および運営管理の主担当者であった保健師4名への面接調査と援助記録等の閲覧から得られたデータ、②サービス事業化および運営管理の各過程における保健師の認識と行動	①援助対象：地域住民（コミュニティ・生活共同体を単位にした看護対象の捉え方）	保健師の認識と行動を時系列に沿って一つのサービス内容・提供方法の決定および改善に至る過程ごとに分析し、公共性を念頭において、看護問題のアセスメント、看護目標、看護方法の特質を明確化
中村 美和 (2004) ⁹⁾	化学療法を受ける小児がんの子どもの口内炎に対するセルフケアを促す上で、効果的な看護援助の方向性を導く。	①化学療法を受けている白血病の学童2例への看護援助を通して得られたデータ、②口腔粘膜症状の経過、口内炎のリスクファクター（末梢血白血球数、好中球数、CRP値）、ならびに口内炎に対する看護援助の内容	①援助対象：化学療法を受けている白血病の学童2例と付き添いの母親、②看護援助：口内炎予防と悪化防止を目的とした口内炎に関する情報提供を、寛解導入療法14日目を目安に実施。必要な口内炎に対する看護援助を追加するとともに、明確にされた口内炎の発症パターンと取り入れた看護援助を立案、実施、評価。2例目以降の対象者には、1例目より導かれた看護援助に基づき年齢を考慮し実施。	口内炎の発症パターン（口腔粘膜症状の出現時期、増悪時期、回復時期のリスクファクターの値を整理）と口内炎に対する看護援助の内容をケース毎に縦断的に整理・比較し、対象者間の類似性、相違性を抽出
小西 敏子 ほか (2004) ¹⁰⁾	乳がんの治療法として乳房温存療法と乳房切除術を提示され、治療法の選択を行った患者が、主体的な療養姿勢を形成する過程を促進するための、継続的看護援助を明示すること。	①術前から術後半年間、受け持ち看護師として看護援助を実施しながらの参加観察と、面接調査、記録調査、②8つの事項（乳がん罹患等）に関する思い・考えとその変化、変化に影響を及ぼした事柄、ならびに看護援助の目的・内容と、それによって引き起こされた対象者の意思・態度・行動の変化	①援助対象：乳がん患者（初発、医師より2つの治療法を提示され、治療法の選択を必要とする、当該施設において治療を実施予定）11名②看護援助の目的：患者が治療法選択を行った自信と経験を生かして、療養生活の中で直面する問題に自らの工夫と努力で対処し、長い療養生活乗り越えていく主体的な療養姿勢を促進すること。	個別分析と全体分析から、主体的な療養姿勢を促進するための継続的な看護援助を導く
糠塚亜紀子 ほか (2004) ¹¹⁾	不妊女性に対する看護におけるジレンマの内容と看護上の意思決定までの過程を明らかにする。	①不妊女性に対する看護職者11名への面接と質問紙調査から得られたデータ、②複数の看護の方向性があり、どのような看護をすれば患者にとって良いのか、悩んだり、迷ったりした事例や出来事の実状状況および、事実上の中で現れた様々な価値を明確化し、不妊女性に対する看護が決定できた経緯	①援助対象：不妊女性	各対象の「ジレンマ」「意思決定」を抽出し、時間軸に沿って配置し、「ジレンマ」「意思決定」の意味内容の類似性、異質性に基づき分類し、類似性を分析
丸谷 美紀 (2004) ¹²⁾	家庭訪問援助において、人生の歩みに基づく対象理解により、どのように対象理解が深まり、対象に即した援助へ発展するかを明らかにする。	①筆者自身が保健師の立場で家庭訪問援助を行った3事例の記録、②家庭訪問援助における、筆者自身の対象理解の内容、及び援助行為、ならびに家庭訪問終了後の援助方針決定・変更へ向けた思考内容	①援助対象：筆者自身が保健師の立場で家庭訪問援助を行った3事例	対象理解の深まりと援助の発展について、人生の歩みの情報を加えることによって付加された対象理解と援助方針・援助行為の内容を抽出
銭 淑君 (2004) ¹³⁾	患者個々のより良い血糖を維持するための指標に基づき、具体的な血糖改善対策を立てる「Telenursing」を行い、患者と医療側それぞれの効果を評価すること	①看護指針に基づいた援助を行った、患者と医療側それぞれの効果、②研究者の援助に対する対象者の認識と行動、ならびに血糖の測定回数、記録の完成率（療養行動の主体性の表現として）	①援助対象：台湾のI型糖尿病の青年期の男女3名、②Telenursingにおける看護援助の指針：HbA1c値が9.0%以下を保つ、本人のデータを用いて、療養行動をふりかえるように促す（生活リズム、運動の評価、食事の評価、血糖値変動への対応）、双方向の看護援助、チームアプローチを活用	研究者の援助に対する対象者の認識と行動の変容を抽出し、看護援助の効果を分析

著 者	研 究 目 的	研 究 デ ー タ	看 護 援 助	分 析 方 法
伊藤 隆子 (2004) ¹⁴⁾	要介護者が病院から在宅へ移行する際、在宅での生活を選択し準備し開始し継続していくためのケアマネジメント過程において、在宅介護支援センター所属の看護職ケアマネジャーは、その行動の背景にどのような認識をもつのかわかるにすること	①看護職ケアマネジャー11名に、過去に担当した病院退院時に関わった事例を想起してもらい、在宅療養が開始され継続されていくケアマネジメント過程に対して半構成的インタビューにより得られたデータ、②在宅療養移行期の看護職ケアマネジャーの認識が表現されていた6事例	①援助対象：看護職ケアマネジャーが過去に担当した病院退院時に関わった事例	各対象の認識を時間軸に沿って事例ごとに整理し、在宅療養移行期のケアマネジメント過程にかかわる看護職ケアマネジャーの認識を抽出
長谷川喜代美 (2003) ¹⁵⁾	在宅での家族介護における主介護者の肯定的認識の内容を明らかにし、肯定的認識を高めるための看護援助の方向性を検討すること	①研究者が保健師の立場で家庭訪問を実施した在宅で介護を行っている6事例の記録、②家庭訪問援助過程において把握した主介護者の認識及び援助	①援助対象：研究者が保健師の立場で家庭訪問を実施した在宅で介護を行っている事例	主介護者の肯定的認識内容と援助を時系列で分析し、肯定的認識内容の意識化に関係していた援助の特徴を明確化
遠藤 淑美 (2003) ¹⁶⁾	慢性精神分裂病を病む人の自我発達の可能性を見出し、援助することによってもたらされる自我発達の性質とその経過を明らかにすること	①研究者が自我発達を支援すると思われる看護援助指針に基づきながら3～7ヶ月間継続して看護援助を行った全過程を経時的に記録、整理した対象者と筆者のやり取りの記録、②患者の言動、筆者の認識（解釈・判断・推測）、筆者の言動	①援助対象：精神病院入院中の精神分裂病患者3名、②慢性精神分裂病を病む人の自我発達を支援できると考えられる援助指針	「自我発達からみた患者の状態」を読み取る。「自己意識の変化」のあった場面を取り出す。「変化した自己意識の意味」を命名。「自我発達の性質」を分類命名。それらを経過に沿って位置づけ。
秋元 典子 ほか (2003) ¹⁷⁾	広汎子宮全摘出術を経験する子宮がん患者が、がんと共に安寧に生きるための強靭さを獲得していく過程を明らかにし、強靭さ獲得の過程を促進する看護援助を検討すること	①対象者の看護を行いながら参加観察を実施、面接法、記録調査を併せて実施、②参加観察法：相互作用場面における対象者の言動、研究者の言動や思考内容についてフィールドノートに記述、面接法：半構成的質問紙を用いて術前から術後6ヶ月に6回の面接	①援助対象：初発の子宮癌で広汎子宮全摘出術を受ける入院患者で、会話可能な19名、②対象者の入院から退院までの期間、研究者は受け持ち看護師として病棟看護師とともに対象者の看護を行いながら参加観察を実施	グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考に質的帰納的分析により、対象者の安寧に生きるための取組みの様相と、関連する看護援助を導く
石井 康子 (2003) ¹⁸⁾	行政の保健分野に所属する保健師が、保育所や学校との連携を意図して取組んだ活動を対象に、地区活動としての意味を検討し、その意味をもたらししている看護の特質を明らかにする。	①保育所や学校との連携を目指した地区活動を行い、その活動過程に焦点をあてたデータを得る。また、既に保育所や学校との連携に対し成果が確認できた地区活動事例も研究対象とした。②研究方法1（A町）保健師から、活動内容と保健師の意図を面接で聴取、研究方法2（B町）保健師と筆者が共同で実施した地区活動から、住民の反応・変化、地区資源の反応・変化、活動の広がり、保健師の認識（考えや判断）	①援助対象：A町とB町	研究方法1：活動を構成する活動内容毎の保健師の意図を抽出し、その内容を分類整理し、意図からこれらの活動の目的を調べる。こもれを地区活動の目的の定義に照合し、「目的からみた地区活動としての意味」として記述する。研究方法2：住民と資源の反応・変化、および活動の広がりの内容と、これにかかわる看護活動内容を、地区活動の目的、方法、対象の定義に照合し地区活動として説明できる内容を検討し、地区活動としての意味として記述。
花出 正美 ほか (2003) ¹⁹⁾	頭頸部がん罹患した人の診断からその後1年間にわたる看護実践を経た経験世界を縦断的に明らかにすること	①研究者が研究参加者1名の受け持ち看護師として初診時から1年にわたり継続的に看護実践し、同時に参加観察を行う、②研究参加者の体験、研究参加者と受け持ち看護師との言語的・非言語的相互行為、及び相互行為場面における受け持ち看護師の思考と思い	①援助対象：初めて頭頸部がん罹患し、根治的治療を受けることが予測され、対話が可能。	1年間にわたる縦断的記述資料から、研究参加者の感覚・認識・感情・欲望・価値観の様相を記述し、それらを時間軸に添って再構成し、QOLの局面を記述する。また、研究参加者と受け持ち看護師との言語的・非言語的相互行為の概要を記述し、それらを時間軸に添って再構成し、看護実践の中核ならびに看護実践を経た研究参加者の経験を記述。

表2 抽出された対人援助関係の要素

援助の発展	両者の相互作用		アウトカム
看護専門職	対象（個人・家族・地域住民）		
多義的理解による対象像の形成	関心を寄せる	表出する	自己理解の促進 主体的な意思決定・対処 問題解決力・ セルフケアの向上 豊かな自己の形成
看護方針の焦点化	推し量る	共有 反応する	
個別のかつ包括的な	応える	認める	
看護行為の展開	照合する	応答 応える	
専門性の高まり	委ねる	活用する	
	信頼する	安定 定まる	

2. 対人援助関係の要素の抽出

メタ統合に用いた13の一次論文は、研究領域やテーマならびに分析方法はそれぞれ異なっていたが、複数の研究論文が共通する対人援助関係の要素を説明していた。対象論文から抽出された要素を表2に示す。

対象論文の分析方法は、看護専門職が対象とかかわった過程を、時間経過や看護過程に沿って整理したものがほとんどであった。その過程で、看護専門職ならびに対象（個人・家族・地域住民）の認識・行動に質的变化がみられ、それらの質的变化は両者の相互作用を通して得られていた。

対人援助関係の要素は、次のような対象論文の記述から導かれた。「実施した看護援助は、口腔ケアに対する頻度の増加、自発性、積極性、正確性、継続性を促すことのみでなく、子ども自身による口内炎に対する対処行動の種類を増やし、感染予防行動や日常生活行動におけるセルフケアへの応用性に寄与する⁹⁾」、「看護援助は、対象者に対し、人との関係性の中で自己を表現できる機会を提供するとともに、求める反応が得られる人間として看護師が存在し、対象者に精神的な安定感をもたらした結果、自由な発想のもと、個々の価値観に即した治療法の選択を導き出した¹⁰⁾」、「看護師は対象者の苦痛を推し量ってそれを説明する行為が起き、対象者は配慮されていることを認知し、苦痛に耐える力が生まれた¹⁷⁾」、「対象者は信頼できる看護師に自分をわかってもらっていると思い、その上で努力を認められることは、自分の力を信じて自分で解決していくための力を奮い起こす源になった¹⁷⁾」、「看護師が、対象者が備えている力に信頼を寄せることは、あらゆる生きる営みの原動力となる内なる力を信じ、発揮することを可能にし、過酷な状況をも乗り越えようとする上で不可欠なことである¹⁹⁾」。これらから、看護師との相互作用が始まることで、対象が自分自身をみつめ始め、その過程で自己理解を促進し、その結果対象の力が発現されていることが抽出できた。

また、「保健師は、サービス利用による問題解決のみを目標とするのではなく、利用の過程で、住民一人ひとり・家族の潜在した問題解決能力を促進させることを目

標としていた⁸⁾」、「口内炎による苦痛が生じた際には、子どもと家族とともに口内炎の苦痛に対する対処方法を考えることの方がより重要であった⁹⁾」、「倫理原則に関係しているジレンマを持っていた看護職者は、事前に専門的価値を明確化し、十分な看護過程を通して、看護の対象者の持っている価値を明確化し、看護職者自身の持つ専門的価値と、看護の対象者の持っている価値を区別して考えた上で、相手の立場にたってそれぞれの価値を照合し、対象者にとって最善の看護は何かを考え、対象者の意思決定・権利を保障する看護に至った¹¹⁾」、「一人ひとりの対象を多様な側面から深く洞察して捉えること、特に対象がイメージすることができる、ライフサイクルの一段階先を見通してその生活を捉えていることで、予防的な働きかけを効果的に行うことを可能とする¹⁸⁾」。これらから、対象との相互作用の過程で看護専門職に対象像が形成され、それにより看護の方針が焦点化され、個別のかつ包括的な看護行為を展開できるようになることが抽出できた。

3. 対人援助関係の相互作用の要素

対人援助関係の相互作用の要素と実践知の例を表3に示した。相互作用は、看護実践者（研究者）が対象に関心を寄せる（気にかける）ことから始まっていた^{16,17,19)}。看護実践過程での相互作用として、看護専門職は、対象に関心を寄せ、苦痛や気持ちを推し量り、対象の求めに応え、価値を照合し、対象に委ね、対象の力を信頼するに至っていた。一方対象は、看護専門職に対して、自己を表出し、働きかけに反応し、看護専門職を自己表現できる存在として認め、看護専門職に応えようとし、さらに活用する存在として、定めていた。その過程では、看護専門職と対象の両者に「共有」、「応答」、「安定」という現象が生じていた。

4. 日本型対人援助関係の実践知の抽出・統合のための理論的分析枠組み

以上より抽出された要素をもとに、要素間の関係を検討し、「対人援助関係」として統合した結果、図1に示す日本型対人援助関係の実践知の抽出・統合のための理論的分析枠組みが導かれた。

表3 抽出された対人援助関係の相互作用の要素と実践知の例

看護専門職			対象（個人・家族・地域住民）	
文献番号	実践知の例	抽出された対人援助関係の相互作用の要素	実践知の例	文献番号
1	【共に歩む姿勢】は、当初保健師は本児と母親のために訪問しているものと認識している家族員に対し、「家族の健康生活を支援する立場であることを伝える」というものと～	関心を寄せる 表出する	対象者の声に傾聴的な姿勢で接した結果、「自分で決めたいけど、この選択でよかったか不安が残る」～等、不安や苦痛を表明した。	4
8	療養者の独特の話し方により看護職ケアマネージャー自身が相手との距離を感じていたが、～療養者を理解しようと入院中の病院を何度も訪問していた。		A氏の関心に関心を注ぎつつ時期を待つことが必要だと考えていた。このような筆者の～に対して、次第に＜家族についていくらか話す＞＜自己の苦しみをわかってほしい＞など、自己の気持ちを吐露し始める変化を示した。	10
10	筆者には「あっちへ行ってください」ときっぱりと断った。～他者（筆者）との関わりを最小限にして、自己の安全保障観を保とうという状態から始まった。～A氏の関心に関心を注ぎつつ時期を待つことが必要だと考えていた。			
2	複数の利用者からヘルパーに兄弟の幼稚園送迎の依頼要望があった。同じ幼稚園の親同士の助け合いによる問題解決を阻害する可能性があることから、～保健師が直接、住民同士の相互扶助を促す援助を実施する方針を決定した。	推し量る 反応する	【口内炎に関連する基本的知識・情報を提供する】を実施した。その後、ケースBと母親から口内炎に関する質問が聞かれるようになり、～	3
11	たとえば導尿の際に、対象者の苦痛を推し量ってそれを説明する行為がおき、対象者は配慮されていることを認知し、苦痛に耐える力が生まれた。		要介護者は～表情が変化し喜んでいる様子があった。このことを【要介護者の認知能力と捉え評価】し主介護者に伝えたところ、～満足や喜びが示された。	9
4	対象者に対し、人との関係性の中で自己を表現できる機会を提供するとともに、求める反応が得られる人間として看護師が存在し、対象者に精神的な安定感をもたらした結果、自由な発想のもと、個々の価値観に即した治療法の選択を導き出したと考える。	応える 認める	～等の看護援助を実施した結果、「不安なことがあっても、病院に来たら研究者がいて、研究者に言えば解決しちゃったから、気持ちさがそこで楽になるでしょ」と安心感が得られたことを述べた。	4
7	Messengerで話しあいをしたとき、「最近血糖値がなかなか下がらないので困っている。」と本人より訴えがあった。研究者は大学の授業や他の活動について聴取した。その結果、～ケースCはレポートのまとめ役であり、人間関係で悩みが大きかったことがわかった。研究者は精神的なストレスが高い時にどのように serotonin を増やすかという内容の本を読むように勧めた。		この援助によって対象者の【生きるために懸命に食べる】取り組みが促進された。典型的発言例：「一人ひとりに声かけながら配ってくれと、なんだかとても嬉しくなる。弱っているときにはお膳も重たくて。それわかってきているんでしょうね。～」	11
4	しかし、対象者は、術後の進退に難なく対処していると感じていた。このため看護援助の実際には、術後補助療法の必要性に対する正しい理解を促すこと、不安や苦痛の訴えに耳を傾けともに副作用に対処していくことに力点がおかれた。この結果は、実際には、手術の縮小化に伴う術後後遺症の減少によって、工夫や努力の積み重ねで困難を乗り越え生活に適応していくという道筋を必ずしも必要としない現実が示されたと言える。	照合する 応える	Bケースは、～助言が必要であった。本人からも「食事の記録も確かに負担と感じたが、記録によってどのぐらい食べたかを考えるようになった。自分は言われないとやらない怠け者であり、研究への協力は自分にとってプラスになるので、何時でも協力したい。」と述べた。	7
5	これらの看護職者は、不妊患者やその看護等について様々な専門的価値をもっているが、その価値と区別し、不妊女性個人に対する専門的価値を看護過程の展開から明らかにした。そして、それらを照合し、患者の選択・決定を尊重するという専門的価値のもとに、患者にとって何が最善であるかを見出した～		看護援助が対象者にもたらした思いには、【大事にされていると感じられる】【大事にされることに応えたい】【頑張るぞ】の3つが含まれた。～大事にされていると感じられることが、それに応える気持ちをわきたたせ、頑張ろうという意思を生み出していた。	11
7	青年期の患者は親元を離れ自力で就学や就職という生活再構成の課題に取り組むと同時に、今迄に蓄積してきた生活上の問題点も抱えている。課題を解決するにあたって、身についた習慣や個性と駆け引きしながら模索の日々を送っている。研究者はこのような対象者の特徴をつかみ、患者が自分の生活の問題点を意識できるように関わった。そして改善策を考える際には、患者の自主性を尊重し、患者なりの方法で解決できるよう支援した。	委ねる 活用する	以上の看護援助を継続することを通じ、ケースBは、ベインスケールに興味を示したのみではなく、口内炎による痛みの程度を連日評価し、痛みの程度や鎮痛剤を使用してほしいことを母親や医療者に伝達できるようになった。	3
13	受け持ち看護師は、花藤（患者）に委ねると同時に花藤から委ねられている様相を示す。そこでは、花藤と受け持ち看護師とは、互いが備えている力に委ねていると同時に、委ねられている。		（保育所や学校との連携を図る地区活動の結果）表5に示す関係機関から反応・変化が示された。（表5の一部抜粋：・C保育所、I小学校、Y高等学校が保健師に教育の依頼を行う。・T小学校が保健師に学校保健委員会の委員就任を要請する。）	12
13	花藤（患者）は、自身が備えている力に信頼を寄せており、受け持ち看護師は、花藤が供えている力に信頼を寄せている様相を示す。そこでは、花藤と受け持ち看護師とは共に、花藤が供えている力に信頼を寄せている。	信頼する 定まる	治療法選択の経過を振り返りその努力を認めた結果、「自分で調べたり教えていただきながら選んで。苦しかったけど、これから色んな治療を受けるときに、凄く自信になったと思う」と今後への自信を語った。	4
			【つまるところは自分次第】～とどのつまりは自分がどうするかにかかっているという思いに達すること、つまり事をなすのは自分しかないと思えることが究極の意識として形成されて、はじめてあらゆる困難にしなやかに立ち向かう力を獲得させたことになると考える。	11

すなわち、看護実践過程において、看護専門職の認識・行動ならびに対象（個人、家族、地域住民）の認識・行動は質的に変化し、それぞれ援助の発展、アウトカムをもたらす。これらの変化は、両者の相互作用の現象を通して生じる。この相互作用の結果、看護専門職の認識・行動は、より多義的で、個別的かつ包括的になり、焦点化され、専門性も高まる。一方、対象もその過程を通して、潜在力が発現し、主体性が発揮され、新たな気づきや能力を獲得し、より豊かな自己を作り出す。

VI. 考 察

メタ統合を通して、看護実践における対人援助関係の理論的分析枠組みを導くことができた。

Sherwoodは²⁰⁾、クライアントの見解からケアリングを明らかにした質的看護研究論文のメタ統合より、看護専門職のケアリングの4つの基本となるパターンを導いている。すなわち、治療的相互作用パターン（全体的に治療していくような環境の構築により看護師とクライアントの間の信用と信頼を創る）、看護専門職の知識パ

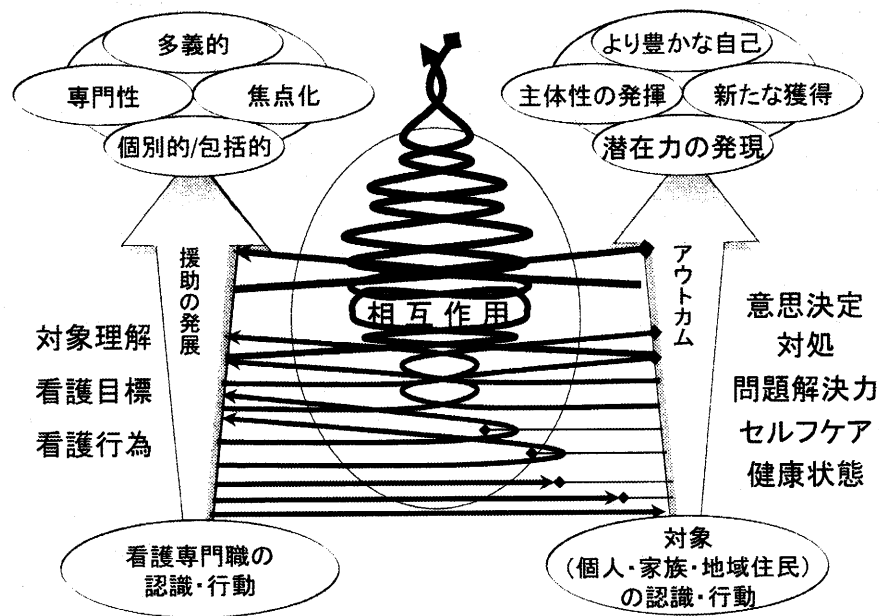


図1 日本人型対人援助関係の実践知の抽出・統合のための理論的分析枠組み

ターン（看護専門職の人間的な態度、人間行動に関する知識、認識に関する知識、聡明な意思決定が創られていく）、意図的な反応パターン（看護専門職は明らかになったニーズや問題に応じて看護行為を選択）、治療的アウトカム/治療パターン（クライアントはケアリング介入がより良い感じをもたらし、積極的安寧を作り出すと述べた）である。これらのパターンは本研究で導いた対人援助関係の要素と類似しており、このことから本研究で導いた理論的分析枠組みは、ケアリングにおける対人援助関係とも考えられる。

横田は²¹⁾、リハビリテーション過程が展開していく時の対象者＝看護者関係を、開始期、関係形成期、自律（立）期の3期に分けて提示しているが、本研究が提示した対人援助関係の枠組みにおいても、看護専門職が看護目標の達成に向けた援助の発展を可能とし、かつ対象にアウトカムをもたらす相互作用は、3つの現象に分けて捉えることができる。すなわち、相互作用の始まりの現象、相互作用を通して両者が変化する現象、相互作用が終焉する現象である。相互作用の始まりは看護専門職が対象に向けて働きかけることから始まり、そこから対象が相互作用を開始する。そして一旦相互作用が始まると、看護専門職の援助が発展し、対象に良い方向への変化が現れる。終焉では、対象は自己や他者に対する信頼を培い、新たな力を獲得し、この時点で看護専門職の目標が達成され、専門性を培う。これらの相互作用の3つの現象を生じさせる技法があり、それは対象の特性によって異なると考えられる。その内容が明らかになれば、対人

援助関係の熟練に向けた育成（トレーニング）が可能となり、看護実践モデルの創出につながると考える。

VII. おわりに

看護実践に関する13の質的研究論文のメタ統合より、日本型対人援助関係の実践知の抽出・統合のための理論的分析枠組みを構築した（図1）。この枠組みが明確になったことにより、対象特性に応じたメタ統合の3つの課題が明らかになった。すなわち、①相互作用を通じた看護専門職の質的变化（援助の発展）、②対象の看護専門職との相互作用を通じた質的变化（アウトカム）、③両者が作りあげていく相互作用の現象である。

今後メタ統合を積み重ね、「日本型対人援助関係」を明らかにしていきたい。

（本論文の概要は、千葉大学21世紀COEプログラム「日本文化型看護学の確立に向けて－実践知の抽出と統合－」第2回COEシンポジウムで発表した。）

引用文献

- 1) 西村ゆみ：語りかける身体、ゆみる出版、2001.
- 2) I.J. オーランド、稲田八重子訳：看護の探求－ダイナミックな人間関係をもとにした方法、メヂカルフレンド社、p61, 1964.
- 3) トラベルビー、長谷川浩他訳：人間対人間の看護、医学書院、p180, 1974.
- 4) 相川充・津村俊充編：対人行動学研究シリーズ1、社会的スキルと対人関係－自己表現を援助する、誠信書房、1996.
- 5) Noblit, G.W. & Hare, R.D. (1988) : Meta-ethnography: Syn-

- thesizing Qualitative Studies. Sage.
- 6) Paterson B.L., et al. (2001) : Meta-Study of Qualitative Health Research, Sage.
 - 7) 佐藤紀子：家族のケア力を高める看護援助に関する研究, 千葉看護学会会誌, 10(1) : 1-9, 2004.
 - 8) 井出成美：保健福祉行政サービスの事業化および運営管理における看護の特質, 千葉看護学会会誌, 10(1) : 10-17, 2004.
 - 9) 中村美和：化学療法を受ける小児がんの子どもの口内炎に対するセルフケアを促す看護援助, 千葉看護学会会誌, 10(1) : 18-25, 2004.
 - 10) 小西敏子, 佐藤禮子：治療法選択を通した乳がん患者の主體的な療養姿勢を促進するための継続的看護援助, 千葉看護学会会誌, 10(1) : 26-32, 2004.
 - 11) 糠塚亜紀子, 森恵美：不妊女性に対する看護におけるジレンマと意思決定の過程に関する研究, 千葉看護学会会誌, 10(1) : 33-40, 2004.
 - 12) 丸谷美紀：人生の歩みに基づく対象理解に着目した家庭訪問援助に関する研究, 千葉看護学会会誌, 10(2) : 17-24, 2004.
 - 13) 銭淑君：青年期Ⅰ型糖尿病患者に対するIT機器を活用したTelenursingの援助および評価一個別の生活パターンをとらえたTelenursingの援助と焦点に一, 千葉看護学会会誌, 10(2) : 33-41, 2004.
 - 14) 伊藤隆子：在宅療養移行期のケアマネジメントにかかわる在宅介護支援センター所属の看護職マネージャーの認識, 千葉看護学会会誌, 10(2) : 56-63, 2004.
 - 15) 長谷川喜代美：家族介護における主介護者の肯定的認識に着目した看護援助に関する研究, 千葉看護学会会誌, 9(1) : 8-16, 2003.
 - 16) 遠藤淑美：看護援助による慢性精神分裂病を病む人の自我発達の性質と経過, 千葉看護学会会誌, 9(1) : 17-25, 2003.
 - 17) 秋元典子, 佐藤禮子：子宮がん患者が広汎子宮全摘出術後を安寧に生きるための強靱さの獲得を促進する看護援助, 千葉看護学会会誌, 9(1) : 26-33, 2003.
 - 18) 石井康子：保育所・学校との連携を意図した地区活動における看護の特質, 千葉看護学会会誌, 9(1) : 49-55, 2003.
 - 19) 花出正美, 佐藤禮子：頭頸部がんに罹患した人の診断後1年間にわたる看護実践を経た経験世界, 千葉看護学会会誌, 9(2) : 1-8, 2003.
 - 20) Gwen . D . Sherwood: Meta-Synthesis of Qualitative Analyses of Caring: Defining a Therapeutic Model of Nursing. Adv Prac Nurs Q, 3(1) : 32-42, 1997.
 - 21) 横田碧：対象者とともに歩むハビリテーション過程と看護, Quality Nursing, 10(7) : 8-12, 2004.

CONSTRUCTING A THEORETICAL & ANALYTICAL FRAMEWORK FOR META-SYNTHESIS OF CLINICAL KNOWLEDGE OF INTERPERSONAL RELATIONSHIP IN JAPANESE NURSING

Harue Masaki*, Yasuko Shimizu*, Yoshiyuki Tadokoro*, Mariko Tanimoto**, Shinobu Saitoh**,
Ayako Sugaya***, Mikiyo Enomoto****, Kumiko Kuroda****

*: School of Nursing, Chiba University,

** : School of Nursing, Tokyo Women's Medical University,

*** : Graduate student at School of Nursing, Chiba University,

**** : The Center for Education and Research in Nursing Practice, Chiba University School of Nursing

KEY WORDS :

meta-synthesis, clinical nursing knowledge, interpersonal relationship, qualitative

The purpose of this study was to construct a theoretical & analytical framework for meta-synthesis of clinical knowledge of interpersonal relationship in Japanese nursing.

We constructed the framework by meta-synthesis of 13 qualitative research which were impressed paper in Journal of Chiba Academy of Nursing Science in 2003~2004, original papers of a thesis or a dissertation, and qualitative research about nursing interventions. As a result, the following were identified: Nurse's cognition/action and Client's (patient, family, citizen) cognition/action were changed through reciprocity between a nurse and a client. Nursing goals and interventions became equivocal, focused, wholistic and professional while clients became growing, empowered as outcome through the reciprocity.

These finding suggested the themes of meta-synthesis according as attribute of a nursing subject.